

2. ある中国人児童の助詞の使用実態 — 1年間のケーススタディを通して—

松本 恭子
南山大学大学院

Abstract :

Report on the use of particles by a Chinese school boy: the result of 1 year' longitudinal study

This study analyzes the use of particles by a Chinese school boy studying at a public primary school in Nagoya. One-year' longitudinal study was conducted to reveal the characteristics of this boy's particle use. 20 hours' taped materials were transcribed and made "vocabulary cards". Cards concerning particles were selected and classified into 4 groups, KAKU-JYOSI, SYUU-JYOSI, SETUZOKU-JYOSI and FUKU-JYOSI. The using order of the particles, frequency of each particles, and errors were analyzed in comparison with another Chinese school girl's case (Nishitani 1997) and M.L.A. studies (Ohkubo, Nagano, Noji).

Findings are as follows:

- 1) Using order: SYUU-JYOSI, KAKU-JYOSI, FUKU-JYOSI, SETUZOKU-JYOSI
- M. L. A.: SYUU-JYOSI, KAKU-JYOSI, SETUZOKU-JYOSI, FUKU-JYOSI
- 2) SETUZOKU-JYOSI "kara, node, noni" did not appear in a year.
- 3) Almost all the particles which were used by 6 year-old Japanese children were used by the Chinese boy in a year (excluding "kara, node, noni").
- 4) Almost all the errors were the use of KAKU-JYOSI.
- 5) The errors of using KAKU-JYOSI "no" and "o" are common both in the case of M.L.A. and Chinese school children.

Results suggest two important points for teaching Japanese at primary schools.

- 1) The use of particles are to be especially taught in the Japanese class.
- 2) Teachers must use particles correctly in his or her speech.

1. はじめに

本稿では、ある中国人児童の来日1年間の助詞の使用実態を報告することを目的とする。結果を、外国人児童の授業観察の記録である西谷(1997a)、及び、日本語の母語習得研究と比較すると、本稿の児童の場合は、来日1年では「格助詞と接続助詞の使用」に問題があることが分った。そして、この結果を、来日1年間の取り出し授業における「日本語授業」と日本人児童と一緒に学ぶ「親学級の授業」に、どのように反映させたらよいかについて提案をする。

ケーススタディはこの児童のみの実態を表わしており、一般化は難しい。しかし、なんらかの傾向がつかめれば、来日1年の児童日本語教育のポイントがしぼれ、ただでさえ授業時間が少ない公立小学校の日本語教育の授業が効率的に行える指針となると思われる。

助詞の使用については、日本語の母語習得研究では、色々と研究がなされている。本稿では、主にケーススタディを中心に、日本人幼児の使用の実態と外国人児童の1年間の使用実態を比較している。日本人幼児の場合は家庭での採集が一般的な自然な会話であり、外国人児童の場合は「日本語の授業」中の会話とインタビューの会話であり、発話の場面が異なるので単純に比較はできない。しかし、何らかの傾向はつかめるものと思う。

なぜ、「助詞」の使用実態を調査したか、その理由を以下に述べる。

日本語の助詞は語と語、文と文のつながりを決定する大切な要素であり、「助詞」の使用が日本語の文構造の枠組みをどれだけ身につけたかを示すものと思うからである。また、助詞は教科の授業で内容の理解を助ける要素となるものである。筆者は、学校での授業が分かるようになるには、「助詞の使用」が大

きな鍵となると考える。しかし、一般的な話し言葉だけの指導では「助詞」の体系的な指導は望めない。1年間の助詞の使用実態を明らかにすることにより、教科理解の力を向上させるために、どのような助詞の要素が特に指導が必要かが分かるものと思われる。

2. 先行研究

まず最初に、児童日本語教育の立場からの研究を紹介する。

大浜(1997)は、ブラジル人児童(来日時8才、小学校2年生)の発話を参与観察によって滞日3ヵ月日から13ヵ月日まで(94年10月～95年10月)調査したものである。16種の発話機能が見られ、各機能を表わす表現形式が豊富になっていくこと、特に文末表現と表現内容が豊かになっていくことが報告されている。

鈴木(1997)は、パラグアイ人児童(来日8ヵ月、10才、小学校6年生)の教室内コミュニケーションについての研究である。クラスメートとの対人関係に与える要因と対人関係の親疎が、この児童の日本語コミュニケーションに与える影響について考察している。96年5月～7月及び12月の授業観察の記録、ビデオ撮影(2時間)、アンケート調査という各方面からの調査をまとめたものである。クラスメートの寛容な接し方が、対人関係を良好なものにしていることが認められている。日本語能力の不足はこの児童には、それほど不安として自覚されていないことも指摘されている。

西谷(1997a)は、首都圏W市の2つの小学校に在籍する合計4人の外国人子女を対象にした、日本語の取り出し授業、学校生活の参与観察の記録である。対象児童は、中国人児童2名(2年生女子と4年生女子)、ブラジル人児童2名(1年生男女)である。1996年4月～1997年2月かけて調査している。対象児童の属する学校へのアンケート調査により学校生活の実態を把握している。西谷(1997b)は、異文化間教育学会での発表要旨である。

白畑(1993)は韓国人幼児(4才4ヵ月から5才3ヵ月)の「の」の過剰生成について調査している。幼児の第二言語としての日本語の縦断研究である。結果として、幼児の第二言語学習者にもこの現象が現れること、母語の干渉とは考えにくいことが明らかになった。

次に日本語の母語習得の立場からの先行研究を挙げる。表1を参照のこと。調査名、被験者・年齢・期間、調査方法・観点という順にまとめた。このうち永野、大久保、野地はケーススタディ、藤友、池は横断的研究である。

永野は習得に、大久保は初出時期に観点を置いている。いずれも、出現した時が習得された時という考えである。厳密に言えば、形が出現しただけであって、用法が習得されたとは言えない。また、野地は発話の資料であるので、筆者が「助詞」の部分だけを抜き出して参考にした。以上の3者は家庭における自由発話を採取している。

藤友は絵を見せて「お話を作る」という指示が出ている。幼児の方からの質問はない為に終助詞「か」等は現れていない。刺激によって産出された陳述文を資料としている。採集場面が異なり資料の質が違うので一概には比較できないが、これらを参考にすれば、日本語の母語習得の傾向はある程度つかめると思う。

また、池は、「が」と「を」の用法はかなり後で習得されることを指摘している。「が」と「を」の用法の習得には、自動詞・他動詞の関係や文の種類が関係してくることを示している。「を」よりも「が」が早く習得されること、2つの区別がはっきりついていない幼児は「が」をよく使う傾向にあること、7歳代になると「が」と「を」の使い分けはほぼ完全なることを指摘している。

以上のように、日本語の母語習得の場合でも、形の出現を習得とする説と、用法の使い分けを習得とする説の2つがある。形はかなり早く出現するが、用法の使い分けは習得するまでにかかなり時間がかかると言われている。

本稿の場合は、助詞の使用状況を報告するのが目的のため、便宜上「自発的な使用による形の出現」を習得と考える。混乱を避けるため「出現」という語を本稿では使用する。

〈表1〉 日本語の母語習得研究のまとめ

調査名	被験者 年齢 期間	調査方法・観点
永野 (1959)	女児 2歳0ヵ月から3歳0ヵ月 13ヵ月間	録音(1ヵ月に5時間)メモ併用。 一定時間内の全部の記録と随時に表現を採集助詞の習得調査
大久保 (1967)	女児 1歳1ヵ月から6歳 5年間	録音(毎月誕生日前後に30分から1時間)随時メモ。速記。4才-24時間調査5才-発問法による語彙調査 ①語の初出年月と6才までの使用数。 ②品詞に分解してみた場合の語の使用傾向。 ③意味分類を試みて幼児の語彙の傾向・特色を見る。
野地 (1973)	男児 生後1ヵ月から7歳まで 7年間	メモ(毎日の発話記録) 誰が誰に、どこで、何時に、どんな状況で発話そのままと記録。幼児期の言語発達記録。
藤友 (1979)	6歳児(平均6;5) 男18名、女16名。 5歳児(平均5;5) 男17名、女17名。 4歳児(平均4;6) 男17名、女17名。 1976年1月22日~3月10日	21枚の採色した絵カードを使って口頭作文。 個別面接法。実験者が反応を記録。資料を格助詞、係助詞、副助詞、接続助詞、間投助詞、終助詞として分類。 平均使用回数を記述。 分類の基準は、西尾実・岩淵悦太郎・水谷静雄(編)『岩波国語辞典第二版』1971、岩波書店による。(函館市内の幼稚園で実施)。
池 (1982)	4歳児群~7歳児群 4歳、5歳、6歳、7歳の 4群 男女各10名	絵と録音テープを用いて「が」と「を」をカットした課題文を聞かせ、被験者に完成した文を言わせる課題文は自動詞文と他動詞文に分かれ、その中でも対応関係がある文とそうでないものに分かれている。 「が」と「を」を逆にすると絵意味が逆転する文も調べている。主格を表わす「が」と目的格の「を」の習得順の調査である。

3 調査の概要

3-1 被験者と調査期間について

被験者は名古屋市内の公立小学校在籍の中国人児童である。ここではSと称する。小学校4年生の男子である(9才4ヵ月から10才3ヵ月)。96年5月中旬に来日した。来日以前の日本語教育経験はない。この児童の来日後2週間目から49週目までの授業録音とインタビュー録音を資料としてまとめた。調査月日と授業内容は〈表2〉のとおりである。Sは週1時間の取り出し日本語授業を受けていた。担当教師は、日本語教育経験はないが、いわゆる40代のベテラン教師である。授業は日本語のみの直接法で行われた。なお初期の授業では同じ学校の中国人児童2年生2名が同席、この児童達が通訳してくれた。また、コンピュータ教材は、ひらがなと中国語の訳が出るもので、最初は主に、コンピュータで、語彙の学習を行っていた。

父親は留学生で5ヵ国語が話せる。日本語にも堪能なので、学校との連絡は支障がない。母親の日本語能力はよくわからないが、家での会話はほとんど中国語である。いわゆる「二言語併用環境」である。Sの性格は真面目で、学習習慣もついており、日本語の宿題も毎回してきた。ひらがな、カタカナは1ヵ月半でほぼ書けるようになった。来日後2ヵ月はあまり周囲と話さず、担任も日本語担当教師も心配していた。担任の配慮でクラスの子どもを頻繁に遊びに行かせるようにし、3ヵ月ごろから友人との交流が深まるにつれて子どもらしい明るい表情を見せるようになった。夏休みもよく友人と一緒に遊んでいたそうである。9月には朝の会で「昨日の体育集会はたのしかったです。」という発言が出来るようになった。日本語担当教師も「習字」の授業でSのクラスへ定期的に行っていたためクラスでの様子や友人関係、行事など細かく把握が出来ていた。3月には、日本語担当教師に甘えて「もう1回カルタやろう」等という発言もみられ、教師との信頼関係も良好であった。なお、調査途中で、2人の中国人児童が転入し、筆者も助手として授業に参加せざるをえなくなった。その為、他の児童の転入時期と、筆者の参加時期を考慮に入れて、3期に分けて分析する。1期は(例)まで、2期は(例)から(例)まで、3期は(例)から(例)までである。

＜表2＞ 調査月日と授業内容

調査月日	来日後の期間	授業内容
①96年5月31日	2週	コンピュータ教材。(勉強道具、教室、挨拶)
②96年6月13日	4週	コンピュータ教材・カルタ* (復習、動物名)
③96年6月27日	6週	コンピュータ教材・カルタ* (復習、数)
④96年7月10日	8週	カルタ・教科書・絵本(身体語彙)
⑤96年7月25日	10週	コンピュータ教材・教科書(学校めぐり、色、号令)
⑥96年8月16日	13週	教科書・カルタ・ゲーム(同じクラスの日本人児童1人同席)
⑦96年9月12日	17週	教科書・カルタ*(助数詞、これはNのNですか?)
⑧96年10月17日	22週	漢字カード・昆虫カード(復習、会話:日常生活)
⑨96年10月31日	24週	漢字カード・教科書(時間割、会話:学校生活)
⑩96年11月7日	25週	漢字カード・教科書(1日の生活、曜日、日付の読み方)
⑪96年11月21日	27週	「国語」の教科書:「やい、とかげ」(読みと意味)
⑫96年12月12日	30週	カルタ・会話・口頭作文(会話:日常生活)
⑬96年12月19日	31週	カルタ・会話・教科書(挨拶、号令、『ひろこさん』)
⑭97年1月7日	34週	会話・教科書『学ぼう2』(会話:冬休みの生活/正月)
⑮97年1月23日	36週	会話・教科書『学ぼう2』(会話:今朝のこと、単位)
⑯97年2月6日	38週	ぐるぐるカード・カルタ・教科書・コンピュータ (『学ぼう2』復習、単位)
⑰97年2月20日	40週	会話・助詞のプリント・漢字カード(会話:今朝の式典)
⑱97年3月6日	42週	カルタ・教科書『まなぼう1』(天気、挨拶、自己紹介)
⑲97年3月13日	43週	カルタ・会話・プリント(会話:学校生活、プリント:短文作り)
⑳97年4月24日	49週	会話・教科書『学ぼう2』復習(会話:新学期の生活)

<教科書の略号>

『ひろごさん』：『ひろごさんのたのしいにほんご』
『まなぼう1』：『にほんごをまなぼう』
『学ぼう2』：『日本語を学ぼう2』
(*は、同校の中国人児童2年生2人が同席：在日2年以上)

- 第1期：①～⑫ 2週から27週…個人指導 教師は担当日本人教師
第2期：⑬～⑰ 30週から40週…1年生の中国人児童転入。クラス人数2人。
担当：日本人教師と筆者。Sは新入児童との通訳もする。
第3期：⑱～㉔ 42週から49週…2年生の中国人児童転入。クラス人数3人。
担当：日本人教師と筆者。Sは通訳や意味の解説を中国語でする。

使用教材はコンピュータ教材「ことばはともだち」(NEC PC9821cb：名古屋市教育局制作)、
「にほんごをまなぼう」(平成4年7月31日発行、文部省ぎょうせい)、市販品のかるた教材(清音、濁音、半濁音)、昆虫カード、漢字カード(小学1年の漢字80字)などである。後半では、国語の教科書や
「日本語指導ワークシート」(名古屋市教育局)「ひろごさんのたのしいにほんご」(凡人社)「日本語を学ぼう2」(文部省)等の教材を使用した。

3-2 調査方法

授業時間40分と休み時間のインタビュー10分間のテープ録音を行った後それを文字化した(1回合計50分)。インタビューは筆者である。文字化資料から「児童が自発的に使用した語彙」を抽出して、前後の文と共にカード2に記入した。今回はこの中から「助詞」だけを選んで出現順、頻度、誤用を調べた。助詞の分類は、見坊・他(1992)による。

3-3 調査結果

3-3-1 助詞の出現順とその頻度数

授業時間の発話とインタビューの発話は質が異なるものである。従って、この2つの場面を分けて記述する。授業時間中でも、雑談の場合はインタビューに含める。<表3-1>は授業時間中の発話で出現した助詞を、<表3-2>はインタビュー時と雑談時に出現した助詞を、それぞれ来日期間順に並べたものである。なお、横軸の助詞の分類は見坊・他(1992)による。また、終助詞、格助詞、接続助詞、副助詞の順番は、永野(1959)と大久保(1967)で指摘された日本語の母語習得の順である(5章参照)。

助詞の出現は13週から始まる。これは来日3ヵ月を過ぎたころであり、このころから、だんだん、文が作れるようになってくる。また、接続助詞は24週、来日6ヵ月を過ぎたころから出現する。その後43週になって始めて「て/で」以外の接続助詞「けど」が出現する。接続助詞「が」はそれより早く授業中に出現しているが、それ以降出現していないので、偶然の使用と考える。格助詞は誤用が一番多いが、その種類も豊富である。他の助詞はあまり誤用がみられない。第3期48週から、格助詞の誤用は減ってくる。正用-誤用-正用と変化する特徴がみられる。「は」「も」以外の副助詞が出現するのは24週である。副助詞は、授業中では「は」「も」以外はあまりみられず、その他の副助詞はインタビュー・雑談時に出現することが多い。終助詞も授業中には限られているが、インタビュー時には数も種類も豊富になってくる。

<表3-1> 助詞の出現順と頻度（授業時）

() 内の数字は出現数。誤用は（誤用数／出現数）と表示。

	終助詞	格助詞	接続助詞	副助詞
⑥13週	か (3)	に (1)		は (10)
⑦17週		の (2)		は(1)
⑧22週				は (2)
⑨24週		の (1) と (2)		は(3)
⑩25週		の(3)		は (7)
⑪27週	よ(1)	に (1/7) の (1/4) と(2)を (1/1) から (3)	て (4) が (1)	は (6) も (1)
⑫30週	な (1/) の (1) かな (1)	に (3/3) って (1/1) で (2) と (1) を (2)		は (6)
⑬31週	か (2)	に (1/1) を(1)		は(7)
⑭34週	かな (1) ね (1)	に (1) の (1) と (1)		は (4)
⑮36週		の (1/3) が (1) と (6)	て (6)	は (6)
⑯38週	よ (1) か (1)	の (1) に (1)		は(2)
⑰40週	か (2)	に (1/10) の (3/8) が (5/20) で (2) と (4/9) って (1) を (6/2)	て (6)	は (1/1)
⑱42週	か (1) 、 ね (1)	の (1) で (1) て (1) って(1) から (2)	て (1)	は (6)
⑲43週		と (1) を (1) の (5) が (1/2)	て(6)	は (11)
⑳49週	の (1)	に (2) で (1)	て (1)	

<表3-2> 助詞の出現順と頻度（インタビューと雑談時）

	終助詞	格助詞	接続助詞	副助詞
⑦17週		の (1)		
⑧22週	じゃん (1) よ (1)	に (2) の (1)		は (1)
⑨24週	よ (1)	に (2) の (3) が (1) で (1) と (3) を (2)	て (1)	は (1) ぐらい (1)
⑩25週		の (2) と (2)		は (4) ぐらい (2)
⑪27週				は (1)
⑫30週	よ (2)	に (1/1) の (4) を (1/2)	て (2)	は (1)
⑬31週	ねえ (2)	に (1) の (9) が (2) で (1) と (1) って (1) だけ (1)	て (1)	は (2) も (1)
⑭34週	よ (1) ねえ (1) ね (1)	に (2) の (3/14) が (2) で (6) と (8)	て (3) で (2)	は (1/4) も (3)
⑮36週	ね (1)	の (4) が (1/3) で (1/6) と (2) って (1/1)	て (8)	は (1) も (2) ぐらい (1)
	よ (1) の (1)	に (2) の (3) が (1/2)	て (4)	は (1)

⑥38週	かな (1) か (1)	で (2) と (1) って (1)		
⑦40週	ね (1)	で (4) の (1)	て (1)	は (2)
⑧42週	じゃん (1) ねえ (1) よ (1) ね (1) (3) の (1)	って (1/1) だけ (1)	て (2)	は (1) ばかり (1)
⑨43週	よ (1) かな (1)	と (1) に (1/1) の (2) が (1/2) で (2/2) を (2)	て (1) へど (1)	は (2) くらい (1)
⑩49週	ね (1) の (1)	に (8) の (11) が (4) で (3) と (7) を (1) だ け (1) や (なんか) (1)		は (3) とか (2) も (1) ぐらい (3)

<表3-1>と<表3-2>を比較すると以下のようなことが分かる。

授業中は、副助詞「は」の使用が多い。教科書は「～は」で始まる表現が多いために、授業内容を反映しているものと思われる。また、初期の授業での教授項目「～に～がある」の反映のために、「に」が頻繁に用いられていると思われる。最初は授業で教えられた項目そのままが多いが徐々に、終助詞や格助詞「って」等、授業で教えられないものも出現する。40週の「助詞のプリント」を使った授業で、格助詞の誤用が多く現れる。その後、格助詞の誤用は少なくなる。インタビューや雑談では、最初から、普通の会話で現れる終助詞「じゃん」等の出現が見られる。副助詞「ぐらい」も早くから現れる。これらは、教科書ではなく、周りの児童の話し言葉からの影響と思われる。また、接続助詞は、授業では「て」のみが現れ、インタビュー・雑談では、43週以降で「て／で」以外の表現が現れる。インタビュー・雑談場面では終助詞、格助詞の使用が多く、副助詞の種類も後半で増えてくる。

3-3-2 助詞の誤用

各回に出現した助詞の誤用を挙げる。なお、正用誤用の判断は筆者が行った。何をもって誤用とするのかは難しい問題であるが、今回は筆者の判断によっている。ある助詞が現れているが、他の助詞の方が正しいと思われるとき「誤用」と判定した。例えば、「に」の誤用とは、その文では「に」が使われているが他の助詞が正しいと思われるものである。助詞の欠落については、出現状況を問題にしているため、今回、調査対象からはずした。助詞の欠落も考慮に入れるべきだとは思うが、どこまでの欠落を正用として認めるかが難しいため、これは今後の課題とする。

以下は、誤用の文である。来日時期順に並べ、*印のところで、その特徴をまとめた。

(T:教師 R:筆者 S:中国人児童)

- 1) ⑪27週 R:ふたりのり。 S:ふたりに、じでんしゃをのっている、だめ。
- 2) ⑪27週 R:だらしが無いって? S:ここのいない。
- 3) ⑫30週 S:ええと。ともだち、いえに、てれびげーむをみて、やきゅうこえんでやる。
*場所を表す助詞「に」と「で」「の」の区別。「に」の過剰使用。「を」と「に」の区別。
- 4) ⑫30週 R:また、ぶたさんいきますか。はい、ぶたさんね。(短文作り)
S:ぶたにおにきりを、(たべる)
- 5) ⑫30週 S:さるに、
S:うんと、さるにい、・・・(さかだちをする)
- 6) ⑫30週 S:しんかんせんの、もけいを、あそぶ。
- 7) ⑫30週 R:(カルタをみせて)うん、なにしてあそんでる?

- S: さるって、あそび、・・・
 *文頭の語の後ろに「に」を使う。「に」の過剰使用（～に～がある、の影響か?）。「を」と「で」の区別。「って」を主語の後ろに使う。
- 8) ⑫30週 S: えーとな、ここ、くさある。
- 9) ⑬31週 R: これ、なにしてる? S: ぞうきんに、ふいてる、つくえを。なにこれ?
 *「に」と「で」の区別。
- 10) ⑭34週 R: とらんぶはやったことある?
 S: やったことお、ちゅうごくはやったことある。
- 11) ⑭34週 R: こういうのじゃない? どういうの、ちゅうごくのたこ?
 S: いろいろある。ん、おおきのりょうもある。
 R: おおきいのもある?
 S: うん、おおきいのりょう。
 *「いろいろのものが」と言うべきところ。「の」の過剰使用。
- 12) ⑮36週 T: Sくんのすんどったとこあつかった、きむかった。
 S: んーと、ふゆがあ、さーむかった。
 T: さむかった。
 S: うんと、なつがあつくない。
- 13) ⑮36週 S: えっと、これとこれ。これでよんだ。
- 14) ⑮36週 S: なかむらくんすわるのところはここです。
 *「の」の過剰使用。
- 15) ⑯38週 S: あの、そのひのたべるものがわるいって、いまかぜが。(ひいている)
- 16) ⑰40週 S: こま(くま)が、うさぎに ひばてる。
- 17) ⑰40週 S: ともだち、のまつ?
- 18) ⑰40週 S: そおちのですだう? そおじの、てつ。あ、ちがう。
 R: うん、そうじ。
 S: そうじ、じをてつだう。
 R: そうそう、そうじをてつだう。
- 19) ⑰40週 R: ともだち?
 S: が
 R: ともだちがまつ、だと、そのこがまつ。
 S: ああ、
 R: ともだち?
 S: は? ↑
 R: ともだち?
 S: を ↑
 R: を、そう。ともだち、をまつ。
- 20) ⑰40週 S: いなご(いもうと)、を、が?_あげる?
- 21) ⑰40週 R: が、を、に、と、どれか入れる。
 S: くまと、うさぎ、が、が、が、?
 R: うん。
 S: うさぎと、くま
- 22) ⑰40週 R: うさぎが、くま
 S: う、う、うさぎ、とくま。

- 23) ⑰40週 S: いたりんごで (ひだりのて)、わたしとにんぎょう。とりがとぶ。
 24) ⑰40週 R: いもうと。
 S: をあげる。
 25) ⑰40週 R: いもうと、に?
 S: を?
 26) ⑰40週 S: わたし、を、にんぎょ、かう。ちがう?
 27) ⑰40週 S: ごみばこ、を、すてる。
 28) ⑰40週 S: を、ってここ?
 *40週で、「助詞のプリント」を学習した。そのときは、まだ、格助詞の使い分けがはっきり定着していなかった。その後、格助詞の誤用は減った。
 29) ⑱42週 S: あ。これってぼくしらない。(漢字カルタで知らない字を見つけて)
 30) ⑲43週 S: ろうかに、はしった。
 31) ⑲43週 S: これで、ゆ。(カルタの文字を見せて)
 32) ⑲43週 S: ろうかではしった。

特に問題と思われる部分を以下に述べる。

- ① 「に」と「で」の区別。文頭の語の後ろに「に」を使う。「に」の過剰使用(例文4、5)。
- ② 「を」と「で」の区別(例文6)。
- ③ 「って」を主語の後ろに使う(例文7)。
 「って」は見坊・他では格助詞と終助詞に分類されていて、「て」の変化したもので格助詞「と」と同じ、という説明が出ている(見坊・他1992: 772)。
- ④ 「の」の過剰使用(例文12、14)。
- ⑤ 格助詞の使い分けの混乱(例文16~28)。特に「を」「が」の混乱が見られる。

3-3-3 中国人児童Sの助詞の出現の特徴

- ① 出現順は、終助詞・格助詞→副助詞→接続助詞。副助詞のなかでも「は」「も」は出現が早い
 が、それ以外の副助詞は来日11ヵ月から出現する。
- ② 格助詞はかなり誤用が多い。しかし、その他の助詞は、最初から正用が現れている。
- ③ 格助詞の主な誤用は、「に」・「って」・「の」・「を」・「が」・「で」である。
 第1期には、「に」を場所を表わすときの「で」と混同することが多く、第2期には「最初の名詞+に」で主語を表わすという傾向があった。「って」も、「最初の名詞+って」で主語を表わす傾向が見られた。「の」の過剰使用の例も3例見られた。第3期では、「を」「が」を「で」「と」と混同していた。

4. 児童日本語教育の先行研究(西谷1997a)との比較

西谷(1997a)は、首都圏W市の4人の外国人児童(中国人2、ブラジル人2)の教室適応と日本語習得についての事例研究である。公立小学校の日本語クラスでの西谷の指導実践からの報告である。

西谷の研究は4人の事例研究である。本稿との比較のために選んだ事例は、Sと年齢、性格などが比較的似ている9才の児童(小学4年生女子)の場合である。研究開始年齢9才、来日3ヵ月から始めて8ヵ月までの記録がある。この児童の授業録音調査4回分より、助詞の出現に関する部分を引用。なお、ここで使われている「助詞」は、終助詞を含んでいない。なお、これは授業中の雑談を資料としている(西谷1997a: 25-40頁より抜粋)。そのため、Sのインタビュー・雑談資料(表3-2)と比較する。

〈表4〉 西谷の外国人児童(女子)の記録

期間：平成8年5月から平成8年10月

授業時間：週2時間、使用教科書：『ひろこさんのたのしいにほんご1』『同2』&『下村式、カタカナ、アイウエオ図鑑』

* ()内は出現数。誤用の場合、(誤用数/出現数)と表記。

6/20(4ヵ月)：は(10)、の(2/5)、で(3/4)、と(1)、が^s(1)、接続助詞：～から(1/5)

8/28(6ヵ月)：は(4/31)、の(5/30)、が(2/9)、で(1/9)、も(1/7)、から(4)、とか(6)、に(1)、
接続助詞：～から(2/10)

10/17(8ヵ月)：の(10)、は(2/7)、とか(5)、も(3)、で(3)、と(2)、から(2)、へ(1)、
接続助詞：たら(2)、から(1/2)、のに(1/1)、けど(1)

10/31(8ヵ月)：は(23)、の(4/12)、で(7)、とか(1/5)、も(4)、を(2)、が(2)、と(2)、に(2)、でも(1)、
接続助詞：～から(6)

・助詞「の」の誤用は最後まで観察された。

6/20：悪い人

8/28：おかしの人、いじめの人、食べるご飯、

10/31：先生これはトム君がアメリカに帰るときじゃない。

飛行機で水とかあげたの人は日本人？

それで、Lちゃんとなりで、いららないのノートは出した。

本稿の中国人児童Sと比較すると、以下のような共通点と相違点が見られる。

〈共通点〉

- 1) 格助詞に誤用が多いこと。
- 2) 「を」の出現が遅いこととあまり使用されないこと
- 3) 「の」と「が」の誤用が多いこと。

〈相違点〉

- 1) 西谷の児童は「から」を来日3ヵ月目から使っているが、Sの場合、1回も使っていないこと。
- 2) 西谷の児童は3ヵ月目から「は」と「が」が共存して使われているのに反して、Sの場合は、「は」は13週(3ヵ月以降)から、「が」は24週(6ヵ月)からというように、使用開始時期に違いがあること。
- 3) 接続助詞の使用開始時期が違うこと(西谷3ヵ月：～から、S 43週10ヵ月：～けど)。
- 4) 格助詞の誤用でもSの場合は「に」「って」の誤用が見られるが、西谷の児童には見られないこと。
- 5) Sは格助詞「へ」を使っていないこと。

5. 日本語の母語習得研究との比較(大久保&永野&藤友)

Sの助詞の使用状況のうち、インタビュー・雑談場面のを日本語の母語習得研究と比較する。

大久保(1967:107)は、自分の調査を永野(1959)と比較して、6つの共通点を挙げている。

- ①大体3歳までに主な助詞は、ほぼ習得出来るとみられる。

②助詞は、いくつかの例外を除いて、だいたい、初出から1、2ヵ月の間に、ほぼ身につけることが出来るようである。

③概して、終助詞、格助詞の習得が早く、接続助詞がこれにつき副助詞が一番遅いようである。

④日常使用されることの多い助詞ほど、幼児も早く習得する傾向にあるように見受けられる。

⑤「から」「けど」などの接続助詞は、初期には終助詞的な用法が多出し、文中に位置して、文と文を接続する用法のほうがおそく固定するようである。

⑥接続助詞のうちでは、順接のものの方が逆接のものより、習得が早い。

大久保(1967:106)では、「副助詞の中では「は」「も」が格助詞と同様に初出時も早く習得も正確であり、その他のものは2歳代3歳代に徐々に使われる。」と言われている。また、「へ」は非常に使用数が少ない。4才までに6例だけである(同上:90)。と言う記述もある。

藤友(1979:15-16)では、以下のような特徴が挙げられている。

①各年齢群において、50%以上の被験者が使用する助詞は、

格助詞…の、に、と、が、を、で 副助詞…か
接続助詞…て、で、と 間投助詞…ね 終助詞…の
である。格助詞が、多くの被験者によって多種使用されている。接続助詞がそれに次ぐ。

②各助詞を群化することが可能であると考えられる。

A群：4歳児と5歳児の間に飛躍的な習得がなされるもの。

格助詞…に、が、を、で、へ 係助詞…は、も、 副助詞…か
接続助詞…て、で、から、のに 間投助詞…よ

B群：5歳児と6歳児の間に飛躍的な習得がなされるもの。

副助詞…まで 接続助詞…と、ので

C群：4歳児、5歳児、6歳児を通じて漸進的に習得されるもの。

格助詞…と、から、や 間投助詞…ね

なお、格助詞の「の」はもっと早い年齢で習得され、終助詞「の」はA群に属すと考えられる。

③6種類の助詞のうち特に平均使用回数が多いのは、格助詞と接続助詞である。終助詞、間投助詞、係助詞がそれに続き、副助詞の使用は少ない。

<Sとの比較>

- 1) 幼児の習得順とSの出現順では、終助詞、格助詞が早い点は共通しているが、Sの場合は、接続助詞が副助詞よりも遅れている点が異なる。
- 2) 幼児が6歳までに50%以上習得している助詞のほとんど(前頁、藤友1979(日)参照)を、Sは1年で使用している。ただし、「へ」は1度も現れていない。被験者が1人なので、偶然出なかったことも考えられる。しかし、大久保の調査でも「使用数が少ない」と言われているので、幼児の習得と同じ傾向だとも言える。
- 3) Sの場合、接続助詞の中で、「から」、「ので」、「のに」がまだ出現していない。
- 4) Sの場合接続助詞の中でも、順接の「て」「で」「と」は早く出現し、逆接の「けど」は1年の終りごろに出現している。このSの傾向は、大久保や永野の調査結果「接続助詞のうちでは、順接のものの方が逆接のものより、習得が早い。」と同じ傾向であると言える。

6. 格助詞「の」と「を」

6-1 「の」について

西谷(1997a)の指摘した助詞「の」の誤用は、Sの場合も出現している。西谷の場合は来日3ヵ月から8ヵ月まで出現している。Sの場合は来日8ヵ月半から9ヵ月で出現している。資料を見る限りでは、この後は「形容詞+の+名詞」の形が出現していない。49週では「動詞の否定形(ナイの形)+名詞」の形が出ている(例文11、14、33参照)。

33) R: いえでどうやってべんきょうするの? ↑

S: んと、よんで、わからないことば、して、してんできます。

白畑(1993b)の韓国人幼児(4才4ヵ月から5才3ヵ月)は、「形容詞+の+名詞」の形を滞在5ヵ月目から9ヵ月目まで使っていた。この幼児の場合、「形容詞+の+名詞」の形が「名詞+の+名詞」の形と同時に現れ、「形容詞+名詞」の形と2ヵ月間共存した(この形の初は滞在7ヵ月目。白畑1993b: 108)。

以上のように、「の」の誤用は出現時期や消失時期には個人差はあるが、これら3件に関しては外国人児童や幼児に共通して現れる現象である。また、この現象は、母語習得の場合にもよく現れるとして報告されている(永野1959; 野地1973、1974)。しかし、個人差が大きく、この形が出る幼児と出ない幼児もいる。大久保(1967)の幼児は、「形容詞+の+名詞」の形は使ったという報告はない。

34) 幼児の日本語母語習得における「の」の誤用例

キイロイノハナ。<2才1ヵ月> (永野1959: 389)

チイチャイノアメチャン チョーダイ。<2才1ヵ月> (野地1973: 4)

オイシーノリンゴ ネ。<2才2ヵ月> (野地1973: 93)

ゴバン(ごはん)。チロイ(しろい)ノゴバン。<2才3ヵ月> (野地1973: 194)

成人の日本語学習者の場合にも、「形容詞+の+名詞」の形は、外国人留学生(タイ人とマレーシア人共に30代)にも見られるという報告がある(白畑1993a)。

6-2 「を」について

格助詞「を」については、中国人児童Sはかなり誤用が多く、まだ、不安定なものである。Sの「を」は来日24週目(6ヵ月)で出現した。その後も出現が不安定で、誤用も多かった(例文1、6、15~21、24、30、31参照)。西谷の研究によっても、「を」の出現は遅く、来日8ヵ月目で、出現している。西谷の児童には「を」の誤用例はないが、「を」が遅く出現するという点で、Sの場合と一致している。

以下は日本語の母語習得における「を」の特徴である。

永野(1959: 393-395): 格助詞「を」はおとなのはなし言葉でも、欠如することが少なくないので、「と」や「の」や「が」などに比べて習得が遅れるものと思われる。そのせいか、初期には、「を」と表現すべき箇所にも誤用が時々現れる。

大久保(1967: 89): 1歳8ヵ月で初出する「を」の項目「これは、使用数が非常に少ない。(1:8) 0.68%、(2:0) 2.19%、(3:0) 2.27%、(4:0) 2.71%。「を」抜ける文は大人にもあるが幼児にはいっそう多いということになる。

野地(1973, 1977) : 1歳10ヵ月に出現してから、2歳2ヵ月まで次の「を」が出てこない。
誤用例もある。

- 35) タータ オ チョーダイヤ。(→母) <1歳10ヵ月> (野地1977: 306)
36) カーチャン ボール オ チョーダイ。(→母) <2歳2ヵ月> (野地1973: 95)
37) タイタイ ガ トッタ トッタ。(→父) <2歳3ヵ月>
父の赤鉛筆でタオルをぶらさげそれを魚(タイタイ)を釣ったのに見立て、言う。
「ガ」は「ヲ」というべきを、このように言った。(野地1973: 185)

以上のことから、「を」は幼児の言語習得においても遅れるものであり、使用数も少なく、間をおいて出現することもあり、誤用も見られることが分かる。

「を」と「が」については、一緒に使う文の形や動詞の種類によっても用法が異なり、これらを区別して用法を習得するには母語習得の幼児の場合でも、7歳になってからほぼ完全に使い分けができるという指摘がされている(池1982: 10)。「を」の使用に関しては、文の形や動詞の種類も関係してくるので、さらに細かく分析が必要である。Sがもっと複雑な文型を身につけ、自動詞・他動詞の区別を身につけないと用法に関しての「をの習得」は分からない。また、「を」は日常会話では、省略されやすく、出現だけを見ても、「を」の用法が分かかって省略しているのか、分からなくて欠落させているのか区別がつきにくい。同じ内容の作文資料と発話資料の比較をすればこの点は解決できるように思える。

7. まとめと提案

7-1 まとめ

Sの「助詞の使用実態」について、簡単にまとめると次の様な特徴が見られる。

- (1)出現順では、終助詞と格助詞はほぼ幼児の場合と同じだが、接続助詞が遅れる点異なる。
接続助詞は西谷(1997a)の中国人児童と比べても遅れている。
- (2)来日1年で、幼児が習得する助詞の大半は出現しているが、接続助詞「から」「ので」「のに」がまだ出現していない。
- (3)格助詞は、誤用は多いが、種類も多く出現している。資料で見た限りでは、格助詞「へ」はまだ出現していない。
- (4)格助詞の中で、「に」「って」の誤用は、西谷(1997a)の児童にはないが、中国人児童Sの場合、顕著である。
- (5)「の」の過剰使用は、西谷の外国人児童、白畑の韓国人幼児、白畑の成人日本語学習者、永野の幼児、野地の幼児、中国人児童Sに共通して現れた現象である。
- (6)「を」「へ」は、習得が遅れているが、この傾向は幼児の母語習得でも見られる。

7-2 問題点と課題

以上のように、中国人児童Sの1年間の助詞使用の過程が明らかにでき、彼の問題点が格助詞の使い分けと接続助詞の遅れであることが分かった。同じ助詞の中でも、どの用法が先に習得され、どの用法が遅れるのかの分析は、今後の課題である。また、助詞の欠落の問題や、誤用の定義、用法としての習得も、これからの研究の課題である。今回は助詞の使用実態を明かにするのみにとどまったが、文型の複雑さや動詞との関わりで、助詞の実態を捉える必要があると考える。

7-3 児童日本語教育への提案

来日1年目の児童に対しては、特に格助詞の使い分けと接続助詞を来日8ヵ月以降に整理して教える必要がある。本稿の資料によると来日30週で格助詞が多く使用されるようになる為である。また、逆接の接続助詞は43週あたりから、出現してくるが、教科の理解のためには(教科書や教師の説明では、逆接の接続助詞はよく使われるため)、もっと早くから体系的に教える必要がある。その為の提案を以下に示す。

①「助詞」の集中的な指導。具体例としては「助詞のプリント」の活用や作文指導を行うこと。

特に、動詞と助詞の結び付きを強調して教えること。

②取り出し日本語授業の教師の発話への示唆として、助詞を省略しないで、児童に対する助詞のインプットの機会を増やすこと。

③観学級の担任の発話への示唆。教科理解につながる指導の為に。

助詞を省略した話し方を極力避けて授業をすること。教科理解のために、特に接続助詞と格助詞を意識的に使用し、丁寧に授業を行うこと。

周りの日本人児童は、休み時間等では、助詞を省略した話し方をよくする。周りの大人も普通は助詞をあまり気にしていない。従って、外国人児童にとって、助詞のインプットを受ける機会は、教師の発話と教科書等の日本語で書かれた本であると思われる。

しかし、日本語の取り出し授業では、相手が少数であり、子供であるということから、教師自身が助詞を省略した話し方をしてしまうことがある。これは、筆者の実際の体験である。また、学級担任の授業の場合、小学校1年生では、教師は助詞をきちんと意識した話し方をしているが、高学年になるにつれて、助詞や形よりも内容に中心が置かれ、形は意識されなくなる。日本人児童ばかりの場合はそれでもいいが外国人児童のいる学級担任は、形を意識した話し方をする必要があると思われる。外国人児童が安心して学校生活をおくり、授業が分かるようになるためには、以上のような配慮が必要であると考えられる。

謝辞：本稿は、第8回第二言語習得研究会(お茶の水女子大学、1997年12月21日)での発表原稿に加筆修正したものである。当日、多くの方から貴重な御意見や御助言を頂いた。この場を借りて感謝したい。

注

1.これは、「自発的に使用した語彙は習得されたもの」という考えからである。自発的かどうかは、テープの音調と筆者の観察による。授業中の教師の問いに自分から答えたとき、絵を見て自分から日本語を口にしたとき、インタビュー(筆者)の質問に自分から答えたとき、他の児童との会話で自分から日本語を口にしたとき、という場面での語彙を選んだ。従って授業中の言葉の繰り返しや単に教科書を読んだだけのものは使用語彙にいれていない。

2.カードには、問いと答えという形で1枚に記入した。児童の発話した語1つ1つに下線を入れ、1語1枚のカードとした。語の認定は問題が多いが、今回は便宜上『三省堂国語辞典 第四版』(見坊豪紀編、1992年発行、三省堂)の見出し語を参考にした。なお、この手法は、大久保(1980)、大久保・川又(1982)の幼児の発話した語彙調査の方法を参考にしている。

参考文献

池 弘子(1982)「助詞の習得過程 — 「が」と「を」について—」『教育心理学研究』第30巻第1号、1-11頁、日本教育心理学会

大久保 愛(1967)『幼児言語の発達』東京堂出版

----- (1980)「幼児の使用語と語の意味の理解—満2歳当日の一日調査から—」

『国立国語研究所報告65 研究報告集2』、157-183頁、国立国語研究所

大久保 愛・川又留璃子(1982)「就学前幼児の語彙—4児による日常生活語の実態—」

『国立国語研究所報告71 研究報告集3』、237-326頁、国立国語研究所

大浜あとみ (1997) 「年少者の第二言語としての日本語習得に関する事例研究—発話機能の拡がりに
ついて—」『AJALT』v. 20、42-46頁、社団法人国際日本語普及協会

見坊豪紀・金田一京助・金田一春彦・柴田武・飛田良文 (1992) 『三省堂国語辞典 第四版』三省堂

白畑知彦 (1993a) 「連体修飾構造獲得過程における化石化現象」『平成5年度日本語教育学会春季大会

予稿集』、55-59頁、日本語教育学会、5月30日、国際基督教大学

----- (1993b) 「幼児の第2言語としての日本語獲得と「ノ」の過剰生成—韓国人幼児の縦断研究—」
『日本語教育』81号、104-115頁

鈴木紀子(1997) 「外国人児童の教室内コミュニケーション—パラグアイ人児童Nの事例を通して—」

お茶の水女子大学大学院人文科学研究科、日本語文化専攻1997年修士論文

永野賢 (1959) 「幼児の言語発達について—主として助詞の習得過程を中心に—」国立国語研究所
集1『言葉の研究』、383-396頁、国立国語研究所

西谷まり (1997a) 『小学校における外国人子女に対する日本語教育の実態に関する研究—外国人子女の
日本語習得と教室適応—』平成9年3月文部省科学研究費奨励研究(A) 課題番号98780211

----- (1997b) 「外国人子女の日本語習得と学校適応—公立小学校における一年間の教室観察を通じ
て—」『異文化間教育学会 第18回大会発表抄録』136-137頁、異文化間教育学会、

5月31日、龍谷大学

野地潤家 (1973) 『幼児期の言語生活の実態 Ⅲ』文化評論出版

----- (1974) 『幼児期の言語生活の実態 Ⅱ』文化評論出版

----- (1976) 『幼児期の言語生活の実態 Ⅰ』文化評論出版

----- (1977) 『幼児期の言語生活の実態 Ⅳ』文化評論出版

藤元雄暉(1979) 「幼児の助詞の習得に関する発達的研究」『教育心理学研究』第27巻、第1号、

11-17頁、日本教育心理学会

参考資料：助詞のプリント

『日本語指導資料 ワークシート(協)・(傍)』(平成7年4月)名古屋市教育委員会指導室編

文をつくる
①

(1) お母さん が おはりの を ついて いる。
 の お母さん が お父さんの かたを たいて いる。
 (2) お兄さん が 山を のぼる。
 (3) おばあさん が たぬきを みる。
 (4) おじいさん が タクシーの を みる。
 (5) おじいさん が キツヒを て った。
 (6) いもつと が あとつと が けんか する。
 (7) おぼん と あとつと が けんか する。
 (8) おばさん が ヒーターを あひ。

うさぎ が ひっぱっ てる。
 うさぎ が ひっぱっ てる。
 ひっぱっ てる。

くま が ひっぱっ てる。
 ひっぱっ てる。
 ひっぱっ てる。

の あつちを かましょつ、